船引南地区
学校運営協議会だより

令和４年10月

第３号

南地区小・中学生の学力向上について考える
＝第２回運営協議会の話し合いより＝

第２回の協議会では、南地区小中学生の学力向上をメインテーマに話し合いが行われました。

まず、各校の校長先生より、本年４月に行われた「令和４年度全国学力・学習状況調査」(小学校６年生、中学校３年生対象)の本地区平均正答率(図１、図２参照、いずれも全国と対比)をはじめ、数値に表しにくい学力（学習意欲や課題解決に粘り強く取り組む態度など）の実態について詳細な説明をいただきました。それを受けて、今後の学校や家庭・地域社会の教育の在り方について活発に意見が交わされました。その概要を以下にまとめ、ご報告させていただきます。

図１　小学６年生平均正答率

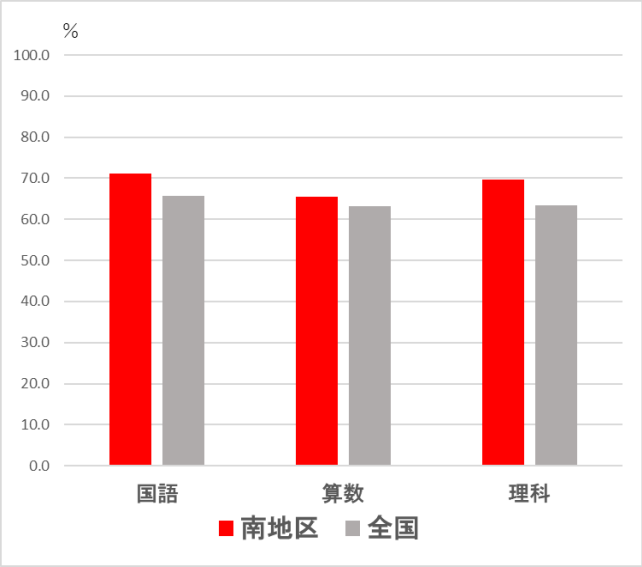
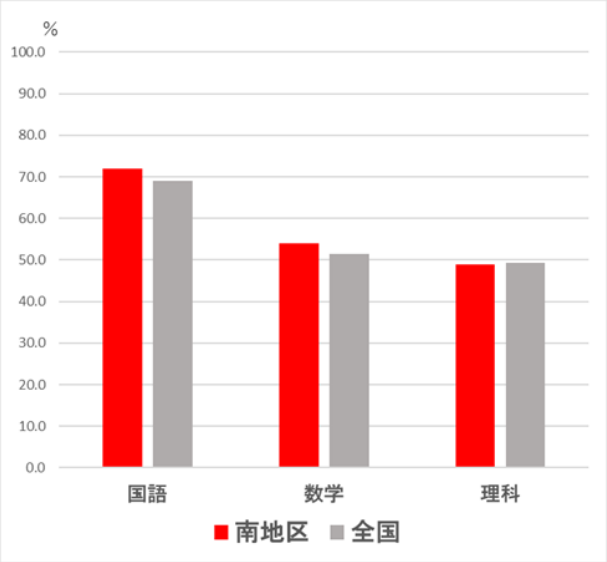


図２　中学３年生平均正答率



注：南地区小学６年生の平均正答率は、芦沢小学校９名と船引南小学校14名、合計23名の平均値を算出

今後の学校教育活動に向けて

①　学力向上のために有効と考えられる手立ての確認と継続

学力調査結果から、いずれの教科も全国平均を上回る、あるいは、ほぼ全国平均並みという良好な状態であり、これまでの取り組みの成果がよく表れている。

②　学校教育活動全体を通じた多様な「書く活動」の重視

学力調査結果を詳細にみると、各学校いずれも「書く力」が弱点のようである。「書く力」をつけることは思考力を高めることにもつながるので重視していく必要がある。

③　自分の気持ちを見つめ、表現できる力の育成

自分の気持ちを書き表すことが苦手な子どももいるようである。自分の気持ちをどのように表現したら相手に伝わりやすいのかについても折に触れ指導していくことが大切である。

④ より高い目標に向かって努力していくための基盤となる「自信」や「自己肯定感」の育成

素直で真面目という長所を持つ反面、切磋琢磨してさらに高い目標を達成するという気持ちがあまり強くない傾向を持つ児童・生徒も見られる。一人ひとりの児童・生徒に合った目標を設定し、それらが達成された経験を数多く積ませていく必要がある。

今後の家庭・地域社会の教育の在り方について

① 学校教育の方針等を肯定的にとらえて支援していく姿勢の継続

地区全体で学校を温かく見守り支援する姿勢が、子どもたちの確かな学力の定着につながっている。

② 子どもたちとの会話の時間の確保

ともすれば、子どもたちと向き合って話す機会が少なくなっているのではないか。家庭や地域で子どもたちとの会話が十分になされているか、振り返る機会をもつ必要がある。

③ 子どもたちが将来の夢を考えるための多様な情報の提供

子どもたちを取り巻く環境は今後も大きく変化することが予想されることから、子どもたちが進路を考える際には、身近な大人の経験からだけでは語れないことも出てきている。そのため、大人たちが社会の変化や求められる職業などについてアンテナを高くして情報収集し、子どもたちに提供することも重要である。

質の高い小中一貫教育を目指して
＝教育目標の検討始まる＝

小中一貫教育とは、「小・中学校段階の教員が目指す子供像を共有し、 9年間を通じた教育課程(=教育の計画)を編成し、系統的な指導を目指す教育」です。

各小・中学校が別々に教育の目標や指導計画を策定して教育を行う場合、ともすると小学校と中学校の指導の間に段差が生じ、中学校での学習や生活にスムーズに移行できないといった悩みを抱える生徒が出現する可能性が指摘されてきました。しかし、小中一貫教育では、9 年間を見通した計画の下で教育活動を行うため、子どもたちにとってより円滑な学校生活が望めるということになります。

令和 5 年度、本地区では小学校が 1 校、中学校が 1 校となることから、ますます小中一貫教育が構想しやすい環境となります。そこで本協議会では、次年度の小中一貫教育推進に向けて学校教育目標の検討をスタートさせました。教育目標が定まれば、その後は、目標の具現に向けてどのような指導に重点を置くか、時間配分をどうするかなどを教職員の皆様に検討していただき、来年 3 月には、指導計画作成→運営協議会にて承認という運びとなります。

編集・発行：船引南地区学校運営協議会
会長　遠藤さとみ、副会長　三浦友貴、委員　橋本祐作、委員　松崎勝弘、委員　吉田和彦
委員　佐藤洋子、委員　佐藤幸子、委員　桒原義昌、委員　根本君江
委員　鈴木敏夫(芦沢小校長)、委員　平野美和(南小校長)、委員　高田秀人(南中校長)